

最後に

14回目になる今回の支援活動も予定通りに実施し、無事終了いたしました。当地の人々からはたいへん喜ばれ、私たちの活動に対する期待感を肌で感じました。これもひとえに、日本で協力頂いている数多くの皆様方の、真心のこもったお力添えの賜物であります。誌上を借りて、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

この活動は小さい輪ではありますが、タイと日本の信頼関係の醸成につながれば、望外の喜びであります。この先も、さらなるご支援・ご協力をお願いし、活動報告といたします。ありがとうございました。

最後に会計報告を致します。

会計報告 (10・8 ~ 11・7)		単位 円	
収	入	支	出
奨学金寄付	182,000	現地活動費	379,489
その他寄付金	105,000	印刷費	22,000
リサイクル売却益	82,050	通信費	18,000
衣類送料寄付金	6,000	車両費	15,800
葛城山麓を守る会7	100,000	葛城山麓活動費	3,000
会費	34,650	雑費	89,650
前年度繰越金	18,053	次年度繰越	15,614
合計	527,753	合計	700,509

※ 1 バーツ = 3、0円として計算

現地活動費内訳

奨学金	219,000	学用品(ノート、鉛筆)	8,715
ゴムゾーリ代	25,734	滞在費	11,400
交通費	35,600	その他(手土産など)	79,040

差引残高 15,614 円 (次年度に繰り越し)

SEP



第23号 12・7・26発行
代表 山本宏文
奈良県葛城市竹内290-2
TEL & Fax (0745) 48 - 5174

Saiwa Education Program(サイワ教育プログラム) E-mail saiwa-yokiyusan@kcn.jp

第14回 タイ支援活動

今年の支援活動は、6月1日からタイ北部チェンライ県メースオイ郡にあるファイマサン小学校を中心として、奨学金や学用品などの支援を実施しました。支援の内容は、同小学校の子どもたち30名へ奨学金を支給し、300名弱の全校児童には学用品(ノート、鉛筆)、そしてゴムゾーリなどの配布をいたしました。さらに、他の地域でも、三名の学生へ奨学金支援などを実施いたしました。

なお、今回の参加者は、山本宏文(代表)、山本るみ子、そして辰巳弘子さんの三名でした。以下、その時の模様を紹介し、この活動にご支援・ご協力下さっている皆様方への報告といたします。

現地まで

5月31日午後10時30分、近鉄とバスを乗り継ぎ、私たち三名は関西空港に到着した。夜遅く飛び立つ便は少ないが、私たちの乗るタイ航空のフロントはかなりの人が並んでいる。ま、時間には余裕を持ってきているので慌てることはないが、たいへんな混雑であった。搭乗の手続きのあと税関を通り、時間があるので免税店をのぞいたりしていた。

6月1日午前0時30分発のTG673便バンコク行きに搭乗したが、ほとんど満席に近く、ゆっくりと横になるという余裕はなかった。

バンコクまでは約6時間のフライト、現地時間4時20分(時差は2時間なので、日本時間では6時20分)にバンコクに到着した。この空港はじつに広く、乗り換えのため15分以上歩かなければならない。ただし、大きな荷物は預けてあったので、手荷物だけの異動、その点は楽であった。これが同じ空港会社の乗り換えの徳点である。もし他社間の飛行機での乗り換えなら、預けてあった荷物をバンコクでいったん引き取り、再度預け直さなければならぬ。

ここでチェンライ行きの飛行機(TG130)に乗り換えるのだが、8時15分発の便なので、約4時間の待ち時間がある。この時間は、まだ免税店も開いていないし、疲れもあつ

たので、そこでゆっくりと待つことにした。しばらくすると、東の空が白くなってきた。待合所の人の数も多くなり、出発30分前には搭乗手続きが始まった。

チェンライ空港へは、予定通り9時35分に到着した。ここはミャンマーに隣接するタイ最北部、地方の空港なので、国際線からの乗降客もそれほど多くはない。ほとんどは国内線利用の人たちだった。空港へは、現地で案内などをしてくれるアヌチットさんが迎えに来てくれていた。彼とはもう20年以上の友人である。彼の車に乗って、市内中心部にあるセンプウ・ホテルに向かった。

ホテルで小休止ののち、支援活動の準備をするため市内へ買い物に出かけた。支援品は、全校児童に渡すものとしてゴムゾーリと鉛筆・ノートの学用品である。まずゴムゾーリは、毎年行っている問屋で300足を買った。そこのおんな主人とは、顔見知りなので愛想良く出迎えてくれるはずだが、この人はじつに不愛想な人である。が、仕事はテキパキとこなし、その面では信頼できるように感じた。

次に学用品だが、今までと違う店に行った。というのは、少し離れたところに大きな問屋があり、品数も種類もかなり豊富であった。これもまた300人分を揃えた。それらを車に積み込み、これからの支援活動に備える。そうこうしているうちに約束の時間となり、一人目の奨学金を支給しているこの家へと向かった。

奨学生宅へ

6月1日、約束の午後4時、ティダラットさん（大学4年）とポンサコーン君（高3）の家に着いた。彼女との付き合いは古くもう13年目になる。出会いはというと、知り合いの先生からの紹介で、じつは担任の中に両親のいない子がいる。何とか奨学金の支援をして貰えないかということだった。初対面の頃は、まだ小学3年生になったばかりで、私たちに会ったとき恥ずかしそうなそぶりをしていた。何を話しかけても、ただ下を向いて小さな声で話していた。

なお、彼女を紹介されたとき、姉と弟の二人も紹介されたので、この子たち三人に奨学金を支援していた。ところがこの二人は、三年あまり前に消息不明になってしまった。少数山岳民族という立場に置かれている彼ら彼女らの、きびしい現実を垣間見たような思いであった。

さて、ティダラットさんの進路であるが、彼女は卒業後、近くにあるチェンライ空港に勤務することになっている。そしてポンサコーン君のほうは、好きな機械いじりを活かして、

【奨学金受給の条件】

奨学金の支給は先生方の相談によって決められているが、その条件は次のようになっている。

- 1、家が貧しい子
- 2、学習意欲がある子
- 3、先生の言うことをよく聞いて成績のよい子
- 4、学習に積極的な親の態度
- 5、上記を先生方が検討し、家庭訪問のあとに決定する

学校へ行けない子

この地域で学校へ行っていない子は、わかっている範囲で8人いる。その理由は、親がいない子。親がいても言葉（タイ語）が分らず、結果、学校へ連れて行かない子。親が遠く離れたところにいるため、放置されている子など。役所から入学案内の連絡はあるが、手紙を読まない、また読めないため、そのまま放置されている子どもたちである。

別枠の奨学生

先ほども紹介したが、タリカさんは大学4年である。今年が奨学金支給の最後の年になる。来年3月には卒業だ。その後の進路としては、この地にある政府関係の地域振興施設—OBTで働きたいとのことである。

私たちには分らないが、この辺りには麻薬がらみの事件も起こっているようで、それに関する仕事などもしてもらえれば、ということであった。ただし、もちろん採用の試験があり、それに合格してからのことである。



(OBT での懇談風景)

強かった。その約束はしっかり履行されている。

さて、彼女の実家であるが、小学校から3キロほど離れた場所で、道路から急な傾斜地を100メートルほど登ったところにある。この傾斜は半端なものではなく、30度ほどの傾斜であろうと思われた。そこへは車で行ったが、4WDでなければとても行けるものではない。土地の人々は毎日この道を使って暮らしているのだが、若い人ならともかく、年取った人ではかなりきつい坂道であろう。ここでタリカさんの家族と談笑する。

2、チャブくん

次に訪問した奨学生の家は、Jirachot Jabu 君（2年生）の家である。この子はラフ族、両親と男兄弟3人の一番下の子である。父親は35才、母親は32才、さらに祖父（母の父）と6人で暮らしている。この地はどこも同じで、山の傾斜地に高床式の家が建っている。下では穀物や薪などを貯蔵し、竹で造った上で家族は暮らしている。また仕事はというと農業しかなく、この地の人々は少しの土地で米やトウモロコシなどを作っている。耕作面積が少なく肥料もないので、共に収量は少なく、足りない分は日雇いで稼いでいるのが現状である。なお去年はトウモロコシを売って3,000バーツ（約1万円）稼いだと話しておられた。



（ 奨学生の家で記念撮影 ）

3、ロータさん

この子は小学4年、ラフ族の女の子である。両親と祖母（母の母）、そして子どもは3人、6人家族の長女である。父は31才、いまはチェンマイで日雇いの仕事をして、時々2千から3千バーツを持って帰ってくる。母は29才、田んぼの仕事を一人でこなしている。去年はトウモロコシを売って1万バーツ稼いだと話していた。また米は10キロの袋60本を収穫し、ブタも3頭飼っている。じつに働きものの母親である。

さて、ロータさんのことであるが、登校時間は午前6時と早く、費用は学校負担の乗り合いの車で登校する。この子は算数が大好きで、友だちもたくさんいる。毎日学校が楽しいと話していた。

オートバイの修理の仕事をする話していた。彼らの祖母は、これでやっと一安心というところである。

また、この子たち二人に対する、私たちの奨学金支援という活動も、奨学生が無事卒業してくれたし、就職先も決まっているということで、一つの区切りを迎えることができた。来年会うころには、きっと立派な社会人となって仕事もこなし、タイの社会のために働いてくれていることであろう。その姿こそ、私どもの支援活動にご協力頂いている日本の皆様へのご恩返しである。彼らと共に近くの食堂で夕食を取ったのち、そういう姿を見ることを楽しみにしつつ別れた。

ファイマッサン小学校へ

6月5日、今日は活動拠点としているファイマッサン小学校へ出向く日である。実は、前日の4日（月）に行く予定であったが、当日は祝日にあたり、学校も休みということで翌日に変更した。

朝8時30分、アヌチットさんの運転する車で、私たち三人は小学校へと向かった。途中、知り合いのバンディットさん（来日経験のある元小学校の先生）を乗せた。途中まではきれいに舗装された大きな道路であるが、山道にさしかかるとカーブが多い。出会う人はほとんどない。たまに会うのは山岳民族の人たちぐらいである。でも車の両側は緑が一杯。山の斜面にはバナナ畑やトウモロコシ畑などが広がっている。そんな中を30分ほど行くと、目指す学校が見えてきた。

定刻の10時にファイマッサン小学校へ到着する。そこには、校長先生以下各先生方、さらには、以前日本へ来た、元当校の教頭先生で、いまは他校の校長をしているプラパットさんの顔、あとで詳述する奨学生－タリカさん姉妹の顔もあった。一年ぶりの再会であるが、みんな元気な笑顔で私たちを出迎えてくれた。一年に一度の出会いであるが、毎年々々の積み重ねの結果、違う人種、違う言葉でも、じつに親しい関係を築くことができることのうれしさを感じた。



（ ファイマッサン小学校 ）

贈呈式の様子

さて支援の式典であるが、その流れを紹介いたします。

まず司会の先生から子どもたちに、今日の式典の次第や意義について説明しておられた。私たちが日本から来たこと、たくさんの支援品を持って来てくれたこと、以前から長く続けてくれていることなどを紹介し、みんな感謝の気持ちを忘れてはならないと教えられていた。

続いて、チェッサダー校長先生のあいさつがあり、そのあと私—山本代表からあいさつをした。

フェイマッサン小学校の子どもたちへ贈る言葉（12・6・5）

ファイマサン小学校のみなさんこんにちは。

私は日本から来た山本です。隣にいるのは私の妻です。みなさんは私たちの顔を憶えていてくれますか？

そして今回、新しく来ました辰巳さんです。今年は私たち三人が来ました。

私たちは、あなた方の中の30人に奨学金を持ってきました。さらに皆さん全員にノート・エンピツ、さらにゴムゾーリなどを持ってきました。

なぜこのような活動をしているかというと、皆さんがしっかり勉強して、タイの国の人々に喜ばれるような、社会に役立つ人間になって貰いたいからです。

そして、この活動には、じつに多くの日本人たちが協力し、また陰から支えて下さっています。だから私はこの活動を続けることができるのです。

日本人たちの期待にこたえてくれることを期待して、私のメッセージといたします。

メッセージを伝えた後、壇上において奨学金を30人の子どもたちに手渡した。私たち3人と両校長が封筒に入れた奨学金を持ち、選ばれた子どもたちに順次、しっかり頑張ってくれるように声をかけながら一人ひとりに手渡した。続いて、ゴムゾーリや学用品300人分を校長先生に渡した、これは、奨学金をもらえない子どもたちにも、何か支援してやりたいという思いから



（奨学金を子供達に手渡す）

始めたことである。そのあと、先生方と奨学生、それと私どもと一緒に記念写真を撮った。

さらに、この活動を担当される女の先生から、奨学金の使い方についての説明があり、奨学生の親を代表して、感謝の言葉と手作りのお土産—刺繍した袋物などを頂いた。



その後、教室での授業風景や（奨学生達と記念撮影）

いろんな学校施設を、また食事風景なども見学した。この中で思ったのは、タイの学校では小学1年から英語が必修科目となっていることだ。かなり進んでいると感じた。また食事は、自宅からご飯を持ってきて、おかずは学校で支給されている。おかずの内容は、当日はタイカレー（グリーンカレー）であった。そのあと職員室へ移り、先生方と共に昼食を頂戴した。

奨学生の家へ

1、タリカさん

午後は、まずタリカさんの自宅を訪ねることから始まった。今年、彼女は大学4年になった。彼女に奨学金を渡すようになった経緯は、いまから4年前、小学校の校長からの申し出で、「いま高校3年であるが、大学へ行きたい子を支援してやってほしい」ということから始まった。私たちがその申し出を承諾した理由は二つある。一つは、素晴らしい才能を出来る限り精一杯伸ばしてやりたいということ、さらにはそうすることによって、あとに続く子どもたちへの希望になるのではと考えた。自分も頑張れば、大学へ行くことも可能であると希望が持てたならば、さらに頑張ろうという励みになる。それが、大学生にも奨学金を支給しようとした理由である。

なお、奨学金を支援するための条件として、私たちは彼女に対し次のことを求めた。学校が休みの時は地元へ戻り、地域の子どもの学習の手助けをしてやってほしい、と。さらに、この地に数多く点在している、山岳民族の人々の力になってやってほしいという思いも